

1. 略歴

- 1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1981年3月 東京大学文学部第一類（美学芸術学専修課程）卒業
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程進学
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
（その間 1987年10月～1988年9月 DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生としてハンブルク大学に留学）
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
1988年10月 神戸大学助教授、文学部（哲学科芸術学専攻課程）
（その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究）
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学（博士課程）兼任
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門課程）助教授
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）教授
（その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究）

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

2020年度から21年度にかけての研究課題は、基本的に18年度から19年度にかけての研究課題の継続である。

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説——近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公刊した『西洋美学史』（東京大学出版会）において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもあり、この研究をその後も継続して行っている。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。この2年間はとりわけカントとヘルダーに即してこの主題を検討した。

第一、第二の研究課題とも連関するが、第三に、近代美学を基礎づけた書物と一般に見なされているカント『判断力批判』への新たな接近を試みている。その一端は2020年に公刊した『美学』において公表したが、さらに『判断力批判』第1部の訳・訳註を公刊したいと考えている。

第四に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探る作業を継続している。

c 概要と自己評価

上記四つの課題に関して、この2年間はとりわけ第三の課題に多くの時間を割き、美学の新たな教科書として『美学』を公刊することができた。ただし、この書はかなり専門性を伴うものであるため、より多くの読者に開かれた教科書の必要性を自覚し、新たな教科書の作成に向けて準備を始めた。

d 主要業績

(1) 著書

単著、小田部胤久、『美学』、2020.9

(2) 論文

Tanehisa Otabe, 「Fine Art as the “Art of Living”: Johann Gottfried Herder’s Calligone Reconsidered from a Somaesthetic Point of View」、『Journal of Somaesthetics』、Vol. 6, no. 1、25-35 頁、2020

小田部胤久、「(実践的) 無関心と(美的) 関与——〈美の無関心性説〉再考」、『美学芸術学研究』、29、119-141 頁、2020.3

- Tanehisa Otabe, 「The Significance of the Classics (*koten*) in Modern Japanese Aesthetics」、『JTILA』、44、59-66 頁、2020.3
- Tanehisa Otabe, 「Das Exemplarische und die Originalität. Schellings Kunstphilosophie im begriffsgeschichtlichen Kontext」、
『Athenaeum. Jahrbuch der Friedrich Schlegel-Gesellschaft』、29、95-109 頁、2020.12
- Tanehisa Otabe, 「The Aesthetic Disinterestedness Reconsidered: Baumgarten, Kant, Schopenhauer, and Duchamp」、『JTILA』、45、
31-37 頁、2021.3
- Tanehisa Otabe, 「The conceptions of Folk and Art in the Age of Goethe: Herder, Wolf, Görres, and Schelling」、『JTILA』、45、65-
73 頁、2021.3
- 小田部胤久, 「芸術の汎律性について——近代日本における〈日常性の美学〉の試み」、『美学芸術学研究』、39、189-
223 頁、2021.3
- (3) 書評
井奥陽子, 『バウムガルテンの美学——図像と認識の修辞学』、『日本 18 世紀学会年報』、36、149-150 頁、2021.6
- (4) 学会発表
国際、Tanehisa Otabe, 「Schelling in Japan」、Conference organized by the North American Schelling Society、Zoom、2021.5.20
国際、Tanehisa Otabe, 「Aesthetic Disinterestedness: Kant, Schopenhauer, Heidegger, and Duchamp」、The George Story Lecture
at the Memorial University、Zoom (Canada, Memorial University)、2021.5.20
国内、小田部胤久, 「大西克礼とシェリング」、日本シェリング協会、2021.7.3
- (5) 啓蒙
小田部胤久, 「〈よそ〉の美学者——パンタスマに佇む浅沼圭司」、『コメント通信』、16、8-9 頁、2021.11
- (6) マスコミ
「AI 時代の音楽の独創性とは」、『東京大学新聞』、2020.1.28
「カント『判断力批判』からみる美学史と現代思想——『美学』刊行記念」、ゲンロンカフェ、宮崎裕助氏との対談、
2020.11.27

3. 主な社会活動

- (1) 学会
国内、日本シェリング協会、会長、2020.4~2020.7
国内、日本シェリング協会、理事、2020.4~2022.3
国際、Culture and Dialogue、編集委員、2020.4~2022.3
国際、国際シェリング協会、委員、2020.4~2022.3
国際、美学芸術学研究 (韓国)、編集委員、2018.4~2020.3
国際、Athenaeum (国際 Fr. シュレーゲル協会機関誌)、編集委員、2020.4~2022.3
国際、Kalibi (北米シェリング協会機関誌)、編集委員、2020.4~2022.3
国際、Schelling-Studien (国際シェリング協会機関誌)、編集委員、2021.7~2022.3
- (2) 学外組織 委員・役員
日本学術会議連携会員、2020.4~2022.3